



Data

監督・脚本・撮影・編集・製作：
塚本晋也

出演：池松壮亮／蒼井優／中村達也
／前田隆成／塚本晋也

👁️👁️ みどころ

『野火』（14年）で“戦後70年の総決算”をした塚本晋也監督が、初の時代劇で“一本の刀を過剰に見つめる若い浪人”というクソ難しいテーマに挑戦！

そのため、本作に木村大作監督の『散り椿』（18年）のような“華麗なる殺陣”を期待しても当て外れ。主人公の「なぜこの刀で人を斬るのか？斬ることができるのか？」という疑問に観客もつき合わされると共に、意外な結末にビックリ。

こりゃ賛否が分かれるのが当然。また、この結末は日本人でも理解が難しいのだから、ベネチア国際映画祭での受賞は所詮無理・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■塚本晋也監督が初の時代劇に挑戦！■□■

“塚本晋也監督が挑む初の時代劇”と聞き、また“第75回ヴェネチア国際映画祭コンペティション部門正式出品”と聞けば、そりゃ必見！塚本晋也監督は、大きな問題提起作となった『野火』（14年）（『シネマ36』22頁）では監督、脚本、編集、撮影、製作の他、主演まで勤めていたが、そのスタンスは本作も同じで、本作では監督、出演、脚本、撮影、編集、製作を務めている。もっとも、本作は池松壮亮と蒼井優の若手2人を主演に据え、自分は少しサブの立場に回っているが、その存在感はやっぱり主役級！

■□■このクソ難しいテーマをどう考える？■□■

本作のテーマは“一本の刀を過剰に見つめる若い浪人”というクソ難しいもの。塚本監督

はそれがずっと長い間頭の中にあつたらしい。本件のプレスシートの冒頭には、そんな塚本監督の問題意識が明確に書かれている。そのテーマをより具体的に言えば、①なぜこの刀で人を斬るのか。斬ることができるのか。そう考えた侍はいなかったらどうか。②いくら主君の命令とはいえ、やはり斬れない。そんな侍はいなかったのか。ということだが、なぜ彼はそんなことがずっと長い間頭にあつたのだろうか？

戦争の極限の恐怖を描いた『野火』で、塚本監督はイモ、塩、猿から人肉食まで現場主義(?)を徹底させていたが、それは本作も同じ。そのため彼は、本作の時代を、江戸末期250年、戦がなく、貧窮して藩から離れ、流浪の武士となる者も多かった時代に設定した。また、主人公の都築奎之進(池松壮亮)も、藩から離れ、江戸近郊の農村で農家の手伝いをして食を得ている若者、と設定した。都築は、長い太平の後開国するか否か大揺れに揺れ始める中、隣の農家の息子市松(前田隆成)に木刀で剣の稽古をつけ自分の腕も鈍らないよう汗を流す毎日だったが、そんな中で、剣を通じた自分の役割をどのように考えていたのだろうか？

■□■華麗なる殺陣は？『散り椿』と比較すれば？■□■

時代劇は“殺陣”が命。その点では、木村大作監督の“美学”を徹底させ、岡田准一と西島秀俊がそれに応えた『散り椿』(18年)の殺陣はお見事だった(『シネマ42』未掲載)。本作導入部では、都築と市助との、木刀による稽古風景が何度も展開されるから、まずはその殺陣(?)をじっくりと。池松壮介は『散り椿』では、岡田准一らが演じる“四天王”より少し若い世代の控え的な侍の役割だったため、“華麗なる殺陣”には縁がなかったが、本作ではいかなる殺陣を・・・？

他方、『野火』では原隊から離れ敗残兵として彷徨い歩く無様な旧日本兵をリアルに演じた俳優・塚本晋也が、本作ではある“野望”を持った浪人澤村次郎左衛門の役で登場するのでそれに注目！澤村の野望とは、江戸に集合し仲間と合流したのち、自分の組織を立ち上げ、京都の動乱に参戦するというものだ。そんな澤村が導入部で見せる“果たし合い”は市助にとっては見モノだったが、澤村の実力を見切った都築にとってはほとんど無意味なもの。そんなこともあってか、塚本監督は私たち観客にも澤村の殺陣を一瞬しか見せてくれないが、それはちょっと出し惜しみでは？そのため、本作後半での澤村の華麗なる殺陣に期待！

そこではきっと、黒澤明監督『用心棒』(61年)で見た、三船敏郎VS仲代達矢のような名勝負(殺陣)が、本作では池松壮亮VS塚本晋也監督の間で実現するのでは？

■□■無頼の浪人集団との「対決」は？■□■

すると“華麗なる殺陣”の第一陣は、きっと、村にたどり着いてきた、源田瀬左衛門(中村達也)率いる無頼の浪人集団と、澤村との間で展開されるはず。そう期待したが、見事

にそれも当て外れに……。さらに、一度は澤村と共に江戸に向かうことを決断した都築も、遺憾なことに出発の日に急に病気になって寝こんでしまったから、アレレ……。そんな体たらくには、ひそかに都築に思いを寄せていた市助の姉ゆう（蒼井優）もビックリだが、病気となれば仕方なし。

他方、都築が寝込んでいる間に澤村は無頼の浪人集団と対決し、村から彼らを追い出してくれたから農民たちは大喜び。しかし、一人だけ逃がしてしまったため、浪人たちの反撃に遭い村人の多くが殺されてしまったから大変だ。そこで、ゆうが澤村と都築にその復讐を迫ったのは当然。そして、澤村はそれに応じる姿勢を見せたが、さて“一本の刀を過剰に見つめる若い浪人”である都築は……？

■□■なぜこの刀で人を斬るの？都築の混乱ぶりに注目！■□■

武市半平太率いる土佐勤王党では、ボスに忠誠を誓う剣の使い手・岡田以蔵が半平太の指示通りに京都での暗殺活動に従事し、“人斬り以蔵”と恐れられた。以蔵は半平太から命じられるままに剣を使って人を斬ることに何の疑問も抱かなかったはず。しかし、本作の主人公都築は塚本監督の①なぜこの刀で人を斬るのか。②いくら主君の命令とはいえやはり斬れないを具現化したような侍だから、以蔵とは正反対だ。

しかし、ゆうの期待通りに都築は村人たちを虐殺した無頼の浪人たちに鉄槌を下すべく戦うのが当然。そのために日頃市助に稽古をつけ、自分も腕が鈍らないように汗を流していたのではないの？黒沢明監督の『七人の侍』（54年）は農民から雇われた“七人の侍”が、村を守るため野盗集団と戦う物語だったが、そこでは志村喬扮するリーダーの侍・島田勘兵衛の武士として刀を持って戦う意思が明確だった。それと同じように、本作でも澤村は明確な意思を持って“澤村組”結成のための人材を募集していたし、いざというときに剣が果たすべき役割についても明確だった。そのため、無頼の浪人たちと戦う意思も明確に示したが、都築は塚本監督のテーマどおり、“一本の刀を過剰に見つめる若い浪人”らしく、本作後半からは私の予想とは全く違う、思いがけない展開となるので、本作ではそんな彼の混乱ぶりに注目！

■□■ラストに向けて塚本監督特有の美学をしっかりと！■□■

『野火』では、フィリピンの荒野を極限状態でさまよい歩く中での、塚本監督特有の骨と肉が飛び散る美しい映像が印象的だった。他方、日本のボクシング映画の傑作となった『ああ、荒野 前篇・後篇』（17年）（『シネマ 41』50頁）はホンモノの“荒野”ではなく、主人公たちの生きる道がいかに荒野の中にあるかを示していたが、本作ラストに向けては、ホンモノの“荒野”の中で、そしてまた塚本監督特有の美学の中で、都築と澤村の最後の対決が展開されるので、それに注目！とは言っても、都築の病はまだ全然回復していないようで、歩くのもおぼつかないほどのフラフラ状態。また、澤村も浪人たちとの対決で全

員をやっつけたものの、自分自身も源田からの太刀を浴びて致命傷を負ったらしい。しかし、そんな中でも澤村の中央進出の夢は固く、都築に対して「明日の朝出発するぞ！」と宣言したから偉いものだ。

ところが、出発の当日、澤村が都築を迎えに行くと、都築の姿がない。どうも都築は山の中に逃げ出したらしい。そんなバカな！と都築を追う澤村。そして、それに必死でついて行くゆう。そんな構図で本作ラストのクライマックスが訪れるが、さてここでは澤村と都築との間の『散り椿』で観たような華麗なる殺陣は展開されるの？それはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、ここまで“なぜこの刀で人を斬るのか。斬ることができるのか”を徹底させた都築は立派だと褒めるべき？それとも・・・？それは日本人の私でさえ容易にわからないから、いくら本作がベネチア国際映画祭に出品されても、外国の観客や審査員は全くわからないのでは？すると、本作の価値もわからないから、同映画祭での受賞は所詮無理・・・？

2018（平成30）年10月23日記